

[研究論文]

ベートーヴェンのオラトリオ《オリーブ山のキリスト》の 日本語訳上演(津川主一訳詞)について

A Study on the Japanese Version (Translated by Shuichi Tsugawa) of
Beethoven's Oratorio *Christus am Ölberge*

星野宏美

Hiromi HOSHINO

キーワード

ベートーヴェン、オラトリオ、津川主一、岡本敏明、合唱
Beethoven, Oratorio, Shuichi Tsugawa, Toshiaki Okamoto, Chorus

Abstract: The complete performances of Ludwig van Beethoven's Oratorio *Christus am Ölberge* (*The Mount of Olives*) in Japan are thoroughly examined based on original sources such as concert programs:

1. The first Japanese performance with Japanese translation by Tsugawa dated between 1935 and 1939 (6. 12. 1953, Yokohama Oratorio Society Choir)
2. The second performance with the same translation (9. 12. 1954, Kunitachi College of Music)
3. The third performance with the same translation (10. 3. 1964, Tokyo YMCA Choir)
4. The fourth performance with the same translation (7. 12. 1964, Kunitachi College of Music)
5. The first Japanese performance with the original German text (19. 12. 1995, Japan Beethoven Association)
6. The first Japanese professional performance (26. 9. 2021, Bach Collegium Japan)

The performance materials (orchestra parts) used by the Kunitachi College of Music and the two piano vocal scores with Japanese translation by Tsugawa are analyzed to clarify the transmission of both German and English versions of the work to Japan. Japanese chorus movements before, during, and after WW II are also discussed.

1. 序

1.1. 研究の対象、動機、目的

《オリーヴ山のキリスト》は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の唯一のオラトリオである。彼の伝記においても、オラトリオ史においてもその重要性は認められているが、上演機会が極端に少ない。筆者がこの作品の生演奏に初めて接したのもごく最近である。2020年3月5日、ベルリンにて、サイモン・ラトル指揮、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会を聴いた。140年の歴史をもつベルリン・フィルにおいても当作品の全曲演奏は、1970年、ベートーヴェン生誕200年記念イヤーに次いで2回目であった。2020年3月の演奏会も、ベートーヴェン生誕250年ゆえに実現したと言える。しかしこの時、新型コロナウイルス感染症の脅威が迫り来ており、3月11日にはドイツ全土にロックダウンが発令され、その後の記念イヤーの催しはことごとく中止となった。

2021年度、筆者は海外研究制度によりベルリンに滞在した。コロナ禍の1年だったが、晩夏から秋にかけて一瞬、平常に戻った。アレクサンダー・フォン・フンボルト財団が一年遅れのベートーヴェン・フォーラムをハイブリッド開催し、筆者はボンにて対面参加することができた。口頭発表のテーマに《オリーヴ山のキリスト》を選び、世界的にみても記念の年にのみ俄に注目されるこの作品が、日本の合唱愛好家の間では、津川圭一(1896~1971)による終合唱の訳詞・編曲を通して、1935年以来、親しまれてきたことを紹介した¹。2022年秋、日本音楽学会大会の口頭発表では、津川編による終合唱の複数の楽譜を、ドイツ・イギリスの複数の版と比較検討し、諸資料の関連を明らかにした上で、津川の編曲と日本語訳の特徴を論じた²。

終合唱を対象を絞った上記の研究成果は、本稿とは別に論文として発表予定である。本稿では、調査の過程で新たに浮上した《オリーヴ山のキリスト》全曲の津川訳を対象とする。「天使の合唱」あるいは「ベートーヴェンのハレルヤ」と呼ばれる終合唱の日本語訳がこんにちまで90年近く出版楽譜を通して普及してきたのに対し、《オリーヴ山のキリスト》全訳は未出版であり、津川の没後、忘れ去られた。津川訳による全曲演奏の記録もこれまで全く顧みられなかったことがない。従来の研究で等閑視されてきた資料を用いて、この知られざる全訳を明るみに出し、昭和期に盛んに行われたオラトリオの日本語訳上演を再評価するのが本稿の目的である。

1.2. 研究の資料

《オリーヴ山のキリスト》の全訳については、津川自身が原著『教会音楽5000年史』(1964, p. 163)および「天使の合唱」の楽譜解説において言及している。すなわち、1935年に終合唱の訳詞を発表後³、「東京オラトリオ協会のため全訳し、これはのち戦後に岡本敏明氏指揮で、国立音楽大学のコーラスが」(津川、1960, p. 63)「数回歌った」(津川、1963, p. 62)というのである。

国立音楽大学に問い合わせたところ、1954年と1964年の2回の演奏会のプログラムおよび写真を教示いただいた。また、コロナ禍にも関わらず、音楽資料課に保管されているオーケストラ・パート譜2種の現地調査をさせていただいた⁴。両演奏会の写真からは、岡本敏明が指揮台に楽譜を置いていることが確かめられる。これが総譜(フル・スコア)か、ピアノ伴奏譜(ヴォーカル・スコア)かは写真では判然としないが、歌い手たちが手にしているヴォーカル・スコアよりは大型である。いずれにせよ、岡本が用いた指揮譜は大学の保管対象ではなく、散逸した。これが岡本、あるいは津川の私有物だったのかもわからないが、こんにち確認できる両者の遺品には含まれない。合唱および独唱者用のヴォーカル・スコアも、大学には収蔵されておらず、各

人の私有物になったと推測される。個人蔵の2種を筆者は調査することができた⁵。

1964年のプログラムにおいて岡本は、1954年の国立音楽大学による演奏は「二番せんじ」であり、津川全訳の初演は1953年に横浜オラトリオ協会が果たしたと記している。横浜オラトリオ協会合唱団に問い合わせたところ、『90周年記念誌』(2018年)を教示いただき、日時、演奏会名称、会場、曲目、出演者等の詳細(p.37)、さらにはこの時の演奏写真(p.15)を確認できた⁶。歴代のプログラム等の大量の資料は、この記念誌の編纂を終えて廃棄したそうである。

国立音楽大学所蔵の冊子『岡本敏明所蔵音楽会プログラムの整理を通して』(青木、江崎、2007)を精読したところ、上記3回に加え、もう1回、1964年にピアノ伴奏により津川訳《オリーヴ山のキリスト》の全曲演奏がなされたこと、そして、4回のプログラムすべてが岡本の遺品に含まれることが判明した。遺品の整理、管理を担当された江崎公子先生に問い合わせたところ、当該プログラムに加え、数多の関連プログラムを教示くださった⁷。

以上が本論文の資料となる。

1.3. 作品概要と先行研究

本論に入る前に、ごく簡潔に作品の概要を記す。《オリーヴ山のキリスト》は、オリーヴ山(ゲッセマネ)でのイエスの祈りから逮捕までを題材とする、演奏時間50分ほどのオラトリオである。台本はフランツ・クサヴァー・フーバー(1755~1814)により、聖書の記述がドラマティックに翻案されている。編成は、独唱3名(天使セラフィム役のソプラノ、イエス役のテノール、ペテロ役のバス)、混声4部合唱、オーケストラ(フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦5部)である。

1803年にアン・デア・ヴィーン劇場にて初演され、出版社との交渉と改訂を経て、1811年にブライトコプフ・ウント・ヘルテル社から総譜(フル・スコア)とピアノ伴奏譜(ヴォーカル・スコア)が出版された。その後まもなくイギリスでは、英訳歌詞による楽譜が複数出版され、ドイツでも新たな楽譜出版が続いた。詳細は筆者の終合唱論文に譲るが、本稿に関わる英訳楽譜として、①タイトルとストーリーの変更を伴う、ヘンリー・ハドソン訳による《エンゲディ、または荒野のダヴィデ》(Beethoven, 1858)、②ジョン・トラウトベック訳によるプラウト版(Beethoven, 1877)、またドイツ語楽譜として、③いわゆる旧全集(Beethoven, 1863)、④カール・ライネケによるピアノ伴奏譜(Beethoven, 1890)を挙げる。以上のドイツ語楽譜は初版に基づくが、⑤新全集=ヘンレ版(Beethoven, 2009)は手稿譜に基づいて、歌詞を部分的に変更している。⑥カールス版(Beethoven, 2019)は、ドイツ語と英訳歌詞を並べて載せた初めての楽譜である。ドイツ語は旧全集の歌詞を採用し、新全集の歌詞をオッシアで記載している。英訳はプラウト版を採用している。

日本における《オリーヴ山のキリスト》の受容研究は、筆者以前には取り組まれていない。訳者である津川圭一については近年、伝記が出版されたほか(丸山、2016)、津川本人の著作も参考になる。1896年、日本美普教会牧師、津川弥久茂の長男として名古屋に生まれた津川は、少年時代よりオルガンや合唱に親しんだ。関西学院神学部を卒業後、東京で牧師になるが、1929年、33歳の時に辞し、以後、1971年に74歳で没するまで音楽活動に専念する。1920年代より戦後に至るまで多くの合唱団を創設し、指揮、指導に当たった。日本語讃美歌の作曲でも知られる。宗教曲、世俗曲を問わず、多くの歌曲や合唱曲の訳詞・編曲に携わり、多数の楽譜を出版した。

岡本敏明(1907~1977)について、津川の言葉で紹介しよう。「旧組合派の、岡本松籟牧師の

次男として九州宮崎県に生まれ、福島県で育ち、国立（くにたち）音大で、作曲と音楽教育を専攻し、……玉川学園から、現在は専ら母校で後進の指導に当たっている。一般音楽教育に関する著書、作品等があり、大衆的なコーラスの指導者として特に聞こえている。……むろん新しい讚美歌の改訂に直接関与した。」（津川、1964、p.368）

なお、こんにちでは「オリーブ山のキリスト」ないし「オリーブ山上のキリスト」の日本語訳が定着しているが、津川、岡本の時代には「橄欖山上の基督」と訳されていた。

2. 上演記録

2.1. 演奏会プログラム

津川訳を用いた4回の演奏に加え、1995年、日本ベートーヴェン協会主催による「ベートーヴェン生誕225年～祝祭コンサート～」、2021年、バッハ・コレギウム・ジャパン第114回定期演奏会も下記に挙げる。

今回、新聞や雑誌における広告や評、出版された演奏会記録を網羅的に調査したが、バッハ・コレギウム・ジャパンの演奏会を除いて、《オリーブ山のキリスト》の上演は全く言及がなかった。1995年の演奏会については個人のウェブサイトにて情報を見だし、オーケストラを担当した東京交響楽団に問い合わせたところ、演奏会プログラムを教示いただいた⁸。東響もプログラムを保管していた以外には、記録がないという。このように本論文では、演奏会プログラムの資料価値を強く再確認することになった。

結論として、日本における《オリーブ山のキリスト》全曲演奏は下記の6回となる。1953年が津川訳による日本初演、1995年がドイツ語による日本初演である。1953年から1964年の間の4回の日本語上演は、津川と岡本の人脈による。

(1) 津川訳による日本初演——1953年12月6日、横浜オラトリオ協会

演奏会プログラム表紙には、「横浜オラトリオ協会創立二十五周年記念 / 第二十六回定期演奏会 / ベートーヴェンの午後 / 昭和28年12月6日(日) 后2時 / 於 横浜商業高等学校講堂 / 主催 / 横浜オラトリオ協会 / 後援 / 横浜市教育委員会 / 横浜音楽協会」とある。スラッシュ (/) は改行を意味する(以下同)。

ページをめくると、「コリオラン序曲」、「ピアノと管絃楽 / 協奏曲第五番(皇帝)」に続いて、「独唱、合唱と管絃楽 / 聖譚曲『橄欖山上の基督』全十五章 / (本邦初演) 津川主一訳詞」が演奏されたことがわかる。独唱者の列挙後、「合唱 / 横浜オラトリオ協会合唱団 / 国立音楽大学合唱団 / 伴奏 / 国立音楽大学管絃楽団 / 指揮 / 清水嘉介」とある(序曲と協奏曲も国立音大管絃楽団によるが、指揮は伊達良、独奏は伊達純である)。次ページ以降、「祝辞」が続き、岡本と津川も寄せている。岡本の肩書きは「関東合唱連盟常任理事、国立音楽大学玉川大学教授」、津川の肩書きは「宗教音楽家、初代指揮者」である。

演奏写真は左右両端が見切れており、人物も重なりあって、正確な人数は把握できないが、オーケストラは弦28名?(8?+8+6?+4?+2?)、管15名、打1名のおおよそ計44名である。翌年の国立音楽大学の演奏写真と見比べると、少なくとも一部、同じ顔ぶれが確認できる。合唱は、中央に男声を配し、その左右に女声を振り分ける配置のため、テノールとバスは区別ができず、女声は見切れているが、ソプラノ26以上+アルト16以上+男声36の計78名以上である。約半年前の1953年5月23日に行われた「横浜オラトリオ協会 第2回ポピュラーコンサート」の演奏会プ

プログラム(岡本旧蔵)では、合唱団員として計63名(16+17+14+16)が挙げられている。国立音楽大学の合唱参加者は20名程度で、エクストラ的役割を果たしたと考えられる。

横浜オラトリオ協会は1928年に創設、2023年に95周年を祝った、日本最古のアマチュア混声合唱団のひとつである。1964年の国立音楽大学での演奏会プログラムに、岡本が、「十数年前、津川圭一氏から“かんらん山のキリスト”の全訳があることをきいて、先ず、清水嘉介君に彼の指揮する横浜オラトリオ協会で演奏することをすすめ」と、初演の経緯を記している。

清水嘉介は国立音楽大学作曲家出身。津川(1928~1933年)、四戸光雄(1933~1951年)を継いで、1951年に横浜オラトリオ協会の常任指揮者に就くが、国立音楽大学色の強い世俗曲の導入を試みて定着せず、1954年には退いた。独唱のうちソプラノの井上敦子とテノールの波多野靖祐は国立音楽大学で教えていた。バリトンの藤村晃一(1920~2008)は東京音楽学校出身で、カトリック信者。後に岡山大学教授となった。

(2) 国立音楽大学による最初の上演——1954年12月9日、日本青年館

演奏会プログラム表紙の上部には「国立音楽大学 / 合唱と管弦楽 / ベートーヴェンの夕」、下部には「管弦楽 / 国立音楽大学管弦楽部 / 合唱 国立音楽大学 学生 / 1954. 12月9日(木) P. M. 6, 30 / 日本青年館」とある。最初のページに、曲目と楽章、ソリスト名が列記されている。「序曲『レオノーレ』第三 八長調」、「ピアノ協奏曲 第三番 八短調」に、「オラトリオ 橄欖山上のキリスト 津川圭一訳詞」が続き、さらに「交響曲『英雄』第三番 変ホ長調」が演奏された。休憩がどこに挟まれたのかは、記されていない。岡本は「橄欖山上のキリスト」のみを指揮し、その他の曲目は伊達良が指揮した。

他の曲目の解説が「大学楽理科細田道夫による」とまとめて小さく注記されているのに対し、「橄欖山上のキリストについて」は津川の名が大きく掲げられている。成立史と様式的特徴の解説後、津川はベートーヴェンの耳の疾患と失恋に触れ、「そこで彼は人類史上で最大の孤独な人間、ナザレ人に心をひかれたのは、偶然ではない。このようにして世界苦と人間苦をひとり背負うたかのようなイエスの苦難と、その勝利の音楽——『橄欖山上のキリスト』は生まれたのである」とまとめる。「だから、ここに描かれたのは神の子として崇めまつられるカトリック的キリストではなく、苦難と闘い抜いたプロテスタント的人間イエスである。ここにベートーヴェンの信仰の抜きがたい近代性があり、そこから第九交響[sic]の偉大なヒューマニズムとデモクラシーへの[sic]進展していく必然の道が拓かれている」と続ける。ベートーヴェンの宗教曲を伝統的カトリックの枠内を越えて、近代的思想と結びつける解釈は珍しくない。苦難との闘いにプロテスタントの本質を強調するのは、戦前・戦中・戦後を生き抜いたプロテスタント音楽家としての津川の本懐を表して興味深い。そこで一層、注目されるのが最後の段落である。「しかも未だ殆ど、この作品に手をつけた人がいないのに、国立が真正面から、この曲と取組んでみせてくれるのは、楽壇として嬉しい知らせである。わたくしは戦前にこれを訳しておいた。……敗戦後の日本のみじめな姿と、至高なイデオのために殉じたベートーヴェンを想いあわせて、うたた感慨深きものがある。」戦争と結びつきは、結論において再検討しよう。

演奏写真を見ると、オーケストラは、弦39名(10+10+8+6+5)、管15名、打1名の計55名からなる。合唱は1953年と同様の配置の上、大勢が重なりあって判別困難だが、おおよそソプラノ85+アルト70+男声55の計210名程度である。

1964年の再演時のプログラムにおいて、岡本は「昔なつかしい日本青年会館のくにたち音大定期演奏会」と回想し、「そのときのソプラノは二期会の鉄弥恵子さん、テナーは本学の波多野

靖祐君、バリトンは在学中の友竹正則君がやってくれた」と記している。

(3) 東京YMCA合唱団によるピアノ伴奏上演——1964年3月10日、第一生命ホール

演奏会プログラム内表紙に、「東京YMCA合唱団第3回定期演奏会 / 日本青少年教育施設拡充費用募金 / 指揮 相原未治 / 独唱 ソプラノ野崎道子 / テノール 田口興輔 / バス 伯田好史 / ピアノ 小林美樹 / 合唱 東京YMCA合唱団 / 昭和39年3月10日(火)午後7時・第一生命ホール / 主催 日本キリスト教青年会同盟」とある。第1部でバッハの「カンタータ 第4番《キリストは死の絆につきたまえり》」、第2部で「オラトリオ《かんらん山のキリスト》」が取り上げられた。それぞれ「〔邦訳歌詞は、木岡英三郎訳による〕」、「〔邦訳歌詞は、津川圭一訳による〕」と明記されている。合唱は「団員名簿」によると計70名(23+22+11+14)からなり、「第2回演奏会」の記録写真には女声40名程度、男声21名が確認できる。

東京YMCA総主事に続いて、「関東合唱連盟理事 岡本敏明」の「御挨拶」が掲載されている。「ベートーヴェンの方はなかなかの大曲であるが、ふしぎに、わが国で、通して上演されることはすくない。/ 今回は、いずれはオーケストラ伴奏による本格的な演奏を予定しての試演であるとのことであるが、この劇的要素を多分に含んだ名曲を聴くのをたのしみにしている」と記され、専任指揮者の相原未治へのエールが続く。「本格的な演奏を予定」とは、岡本自身が指揮する9ヵ月後の国立音楽大学による再演を踏まえての発言ではあるはずだが、第三者的な書き方である。曲目解説は小泉功により、津川の寄稿はない。小泉功(1907~1992)は、「大阪のクリスチアンの家庭に生まれ、大阪商大を卒業、合唱を永井齊氏、オルガンと作曲を大中寅二氏に学」んだ(津川、1964、p.365)。

東京YMCA合唱団は1960年創設。岡本常任指揮者のもと、相原は副指揮者を務め、1964年に岡本の跡を継いで常任指揮者となった(1970年まで)。プログラムに記されているように、相原は国立音楽大学教育音楽専攻科卒、岡本門下である。男声ソリストおよびピアノ伴奏者は国立音楽大学在学中ないし卒業直後の新鋭たち。ソプラノの野上がやや年長で、既に教鞭をとっていた。男声ソリストは次項の国立音楽大学による再演時と重なる。

(4) 国立音楽大学による再演——1964年12月7日、日比谷公会堂

演奏会プログラム内表紙の上部に「国立音楽大学 / 第22回定期演奏会 / ベートーヴェンの夕」、下部に「合唱 くにたち音楽大学合唱団 / 管弦楽 くにたち音楽大学管弦楽団 / とし 1964年12月7日(月) P. M. 6. 30 / ところ 日比谷公会堂 / 主催 国立音楽大学 後援 国立音楽大学後援会」とある。真ん中に曲目と指揮、独唱が挙げられている。前半が「ミサ曲 ハ長調 作品86」、後半が「オラトリオ かんらん山の基督 作品86 / 津川圭一 訳詞」である。オラトリオの指揮は岡本、独唱は三上茂子、田口興輔、伯田好史。ソプラノの三上は、田口、伯田と同じく学部卒業後、専攻科に在籍していた。ミサ曲の指揮は小山章三により、独唱もオラトリオとは異なる。

上記で引用してきたように、「“かんらん山の基督”とくにたちの合唱」という冒頭文を岡本が寄せている。横浜オラトリオ協会による初演や、その翌年の国立音楽大学による定期演奏会を回顧し、「ちょうど10年ぶりに再演できることになって、なつかしく、嬉しく思っている」、「今回の合唱は小山章三君、オーケストラは岡本仁君にほとんど下稽古してもらい、出来上がったところで頂戴するという割りのいい役をあてがわれて、内心恐縮している」と記す。小山章三(1930~2017)は、「長野県丸子町の商家に生まれ、国立音大の教育学科を卒業、同校で岡本教授の片腕として合唱を指導している」(津川、1964、p.366)。岡本仁(1936~2018)も国立音大教育学科

卒。当時は各地の管弦楽団を指揮しながら、国立音大の講師も務めていた。

岡本敏明に続き、小泉功が「“かんらん山の基督”ということ」という、聖書に即した説明文を寄せており、この作品がこの日のメインであったことを窺わせる(ミサ曲についての寄稿はない)。もしかしたら、本来は津川の寄稿を予定していたが、直前の10月21日に彼が脳卒中で倒れたため原稿が確保できず、急遽、小泉に寄稿を依頼したとも推測される。プログラム後半には、「本学講師 音楽学」の徳丸吉彦による両作品の解説に加え、「歌詞とその大意」が収められている。

演奏写真を見ると、オーケストラは、弦48名(12+12+10+8+6)、管16名(ホルンにアシスタント1)、打1名の計65名からなる。合唱は、1953年、1954年と同様の配置の上、大勢が重なりあって判別困難だが、おおよそソプラノ77+アルト72+男声122の計271名程度である。

(5) ドイツ語による日本初演——1995年12月19日、日本ベートーヴェン協会

演奏会プログラム表紙には、「デビュー200年記念 / ベートーヴェン生誕225年 / ～祝祭コンサート～ / 1995年12月19日(火) 19時 / なかのZERO大ホール / 主催 / 日本ベートーヴェン協会 / 後援 / 墨田区文化観光協会、音楽之友社、カワイ出版 / 協力 / 国技館すみだ第九を歌う会」とある。日本ベートーヴェン協会は1989年設立。1995年当時は第2代会長の石井貞光のもと演奏会やゼミナールを開催していたが、ほどなく自然解消した。

第1部では杉谷昭子(1943～2019)独奏によるピアノ協奏曲第5番が演奏され、「オラトリオ《かんらん山上の基督》」は第2部を占めた。演奏会ははじめと第2部ははじめ、そして演奏会おわりに小山章三のトークがある。指揮は秋山和慶、オーケストラは東京交響楽団、合唱は「国技館すみだ第九を歌う会」を主要メンバーとする「ベートーヴェン生誕225年祝祭合唱団」(37+49+14+18=計118名)である。独唱は山田綾子(ソプラノ)、吉田浩之(テノール)、稲垣俊也(バリトン)。演奏会プログラムには銘打たれていないものの、参加者たちはこれがオラトリオ全曲の日本初演だと意識していたという⁹。1995年には津川も岡本も没して久しく、30、40年前の日本語訳上演について小山が言及したかは不明である。

(6) 古楽による初演——2021年9月26日、バッハ・コレギウム・ジャパン

演奏会プログラム内表紙に、「バッハ・コレギウム・ジャパン / 第114回 定期演奏会 / ベートーヴェン / オリーブ山のキリスト / 日時 / 2021年9月26日(日) 15:00 / 会場 / 東京オペラシティ コンサートホール / 主催 / バッハ・コレギウム・ジャパン / 共催 / 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団 / 助成 / 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業 / 独立行政法人 日本芸術文化振興会)」とある。

指揮は鈴木雅明、合唱とオーケストラはバッハ・コレギウム・ジャパン。合唱は計29名(8+8+6¹⁰+7)、オーケストラは、弦29名(8+7+5+4+3)、管15名、打1名の計45名である。独唱は中江早希(ソプラノ)、鈴木准(テノール)、加来徹(バス)。

2. 2. 津川訳上演の楽譜資料

2. 2. 1. オーケストラ・パート譜

国立音楽大学音楽資料課には、2種のオーケストラ・パート譜セットが保管されている。

(1) イギリス・ノヴェロ版の写真製版

1. 1. 3. に挙げた《エンゲディ、または荒野のダヴィデ》(Beethoven, 1858)の後発版パート譜。

出版年代不明。市販の楽譜の複製(写真製版)である。ObI・IIのパート譜冒頭右上に“R.S.Teatro S. Carlo 6-10-1951 Napoli”と記載され、また、明らかに欧州人の筆跡による書き込みがセット全体に見られるゆえ、1951年10月6日、ナポリのサン・カルロ劇場での上演にて使用されたパート譜の複製と考えられる。

各パートの部数を括弧内に記す。Vn I (6), Vn II (5), Vla (3+手書き2), Vc & Cb (4+Cb手書き1), Fl I・II (1+手書きでFl II), Ob I・II (1+手書きでOb II), Cl I・II (1+手書きでCl II), Fg I・II (1+手書きでFg II), Corne I・II (1+手書きでHorn I, Horn II), Trombe I・2 (1), Trombone 1 & 2 (1), Trombone Bass (1), Timpani (1)

3冊のパート譜(Vn I, 1; Vn I, 4; Vn II, 5)に奏者名が書き込まれている。Vn I, 4の2名は、次項(2)のカルマス版パート譜と共通である。

Corne I・IIには《ミサ曲 八長調》の手書きパート譜が挟み込まれている。筆跡は明らかに職業写譜家ではない。国立音楽大学では、学生が楽譜をなくした場合、ペナルティとして総譜から写して代替を提出する慣習があるという。1964年の演奏時に学生が作成した手書きパート譜が、《ミサ曲》ではなく、こうして誤って《オリーブ山のキリスト》のセットとともに保管されたと推測される。

(2) ニューヨーク・カルマス版

ドイツのブライトコプフ・ウント・ヘルテル社のOrchester-Bibliothek版のリプリント。出版年代不明。1. 1. 3. に挙げた旧全集(Beethoven, 1863)と基本的に一致する。

各パートの部数を括弧内に記す。Vn I (7; 1は欠落), Vn II (7; 7は未使用), Vla (7; 7は未使用), Vc (5; 5は未使用), Cb (4; 4は未使用), Fl I (欠落), Fl II (1), Ob I (1), Ob II (1), Cl I (1), Cl II (1), Fg I (1), Fg II (1), Hr. I (1), Trp I (1), Trp II (1), Trb I (1), Trb II (1), Trb III (1), Timp (1)

9冊のパート譜(Vn I, 3; Vn I, 4; Vn I, 5; Vn I, 7; Vn II, 1; Vn II, 3; Vn II, 4; Vla, 1; Vla, 4)に奏者名が書き込まれている。

(3) 2種のパート譜セットの関係

2種ともに「49.10.9国音」という受入印が押してある。すなわち、1964年(昭和49年)10月9日の受入印である。

奏者名が2種共通であることからわかるように、これらは1964年の奏者たちである。国立音楽大学に照会したところ、ほぼ全員が1964年時点の弦楽器専攻1年から3年に在籍中の学生たちであることが確認できた¹¹。カルマス版には、奏者による演奏のためのメモが数多、書き入れられている(一部内容については後述する)。一方、ノヴェロ版ではティンパニ・パート譜のみにメモが見られ、これはカルマス版のティンパニ・パート譜のメモと同一人物による筆跡である(内容については後述する)。このティンパニ奏者は端正な筆跡や書き込み内容からも几帳面な性格が窺いとれるが、一般論としてティンパニ奏者は全体練習時に暇な傾向があるため、初期段階から書き込みをしたのだろう。

以上から、1964年の練習は、ノヴェロ版を使って始め、途中でカルマス版に乗り換えた結論づけられる。なぜ乗り換えたのかは定かでない。いずれにせよ、1964年に2種のパート譜を同時購入することは、経済的理由からも考えにくい。ノヴェロ版の写真製版は、1951年、ナポリでの使用楽譜の複製であることから、その直後、すなわち1953年の横浜オラトリオ協会およ

び1954年の国立音大による上演のため手配されたと考えるのが自然である。そうであるのなら、その後、岡本、津川、横浜オラトリオ協会のいずれかの所有物として、いずれかの手元に置かれていたのだろうか。1964年、国立音大がカルマス版のパート譜を手配したが、到着が遅れたため、岡本の伝手によりノヴェロ版で練習を始めたのだろうか。その際、国立音大に寄贈されたのであろうか。その一方で、ノヴェロ版には1954年の使用跡が見られないため、1964年に同時購入された可能性も排除できない。

2.2.2. ヴォーカル・スコア

1964年3月および12月の2回の演奏会に出演したソリストが2種のヴォーカル・スコアを私蔵していた。いずれも手書き楽譜の謄写版で、同サイズ、同ページ数である。書誌学的考証を通して新旧の区別ができる。

(1) 旧ヴォーカル・スコア

薄緑色のソフトカバー。表紙には“THE / MOUNT OF OLIVES / AN ORATORIO / COMPOSED BY / L. VAN BEETHOVEN”と英語で記されている。(2) ページに全15曲の目次があるが、各曲タイトルは英語のみである。楽譜本体では、英語の下に日本語が並記されている。訳詞者名は記されていない。日本語表記は旧仮名遣いによる。英語各曲タイトル、英訳歌詞、ピアノ伴奏は、プラウト版 (Beethoven, 1877) のヴォーカル・スコアと一致する。

所有者(ソリスト)による書き込みが見られる。1964年3月10日、東京YMCA合唱団第3回定期演奏会用に入手し、自主練習、合わせ、本番にて使用したと推測される。

カバー裏に「製版印刷 / 渋谷区代々木西原町911 / 手塚芳美」とある。「代々木西原町」は1961年11月15日の地番整理事業実施により廃止されたため、製版印刷はそれ以前になる。他に演奏機会がないことから、元は1953年、1954年の演奏のために製版印刷されたものであろう。紙の質や劣化具合からも、(2) 新ヴォーカル・スコアより大分古びている。切りの良い発注数として、仮に1953年、1954年の2回の演奏会用に500部印刷したとすると、200部弱の残部があったろう。東京YMCA合唱団演奏会で必要とされたヴォーカル・スコアは100部以下なので、全員分を賄えたと仮説が立てられる。もっとも、旧ヴォーカル・スコアの残部は僅かで、ソリストのみが練習用に早期に入手し、合唱団員は新ヴォーカル・スコアの完成を待ったという仮説も可能である。

(2) 新ヴォーカル・スコア

水色のソフトカバー。表紙には“Beethoven / Christus [sic] am Ölberge / Oratorium / Op. 85 / 津川圭一訳詞”とタイトルがドイツ語で記され、訳詞者が明記されている。[2] ページに全15曲の各曲タイトルがあり、“INDEX”と冒頭に掲げられた以外は、旧ヴォーカル・スコアと同一である。楽譜本体には日本語歌詞のみが記されている。日本語表記は新仮名遣いに直されているが、旧仮名遣いも一部残る。また、第15曲に「うたひ」と「うたい」が混在するなど、統一不十分である。ピアノ伴奏は旧ヴォーカル・スコアと同一、すなわち、プラウト版 (Beethoven, 1877) のヴォーカル・スコアと一致する。

楽譜は、譜割りも含めて旧ヴォーカル・スコアを忠実に写譜したものである。写譜家は、音楽的知識と外国語能力が多少欠けていたようだ。たとえば、上記の通り、表紙のタイトルは“Christus”であるべきところが“Chistus”となっている。第1曲冒頭(3ページ)の“Grave”指

示は、旧ヴォーカル・スコアの“a”が読み取りにくいいため、新ヴォーカル・スコアでは“Grove”と転記されている。第3曲のタイトル(10ページ)は、旧ヴォーカル・スコアでは“WITHIN ME”の二語が詰まって見えるゆえ、新ヴォーカル・スコアでは“WITHINME”と一語に転記されている。旧ヴォーカル・スコアで歌詞が欠落していたページの一部は新ヴォーカル・スコアで補足されているが、一部は欠けたままである(後述)。

所有者(ソリスト)による書き込みが僅かにあるが、使用痕跡はほとんどなく、美品である。1964年12月、国立音楽大学の定期演奏会用に支給されたが、既に9ヶ月前に作品を会得していた所有者(ソリスト)は、この楽譜を綺麗に保って使用したのだろう。もしかしたら、旧ヴォーカル・スコアをこの時も使った可能性もある。演奏会の白黒写真では楽譜の区別はできない。いずれにせよ、国立音楽大学の再演では、270名以上の合唱が参加したため、新たにヴォーカル・スコアが300部規模、作成されたと考えられる。

3. 訳詞

3.1. 3ヵ国語歌詞対応表

ドイツ語原語をライネケ版(Beethoven, 1890)に従って、日本語訳を旧ヴォーカル・スコア(1953/54年)に従って、英訳をプラウト版(Beethoven, 1877)に従って、3ヵ国語対応表を作成した(付録)。

ドイツ語版は初版以降、一貫して全6曲の番号付けをとるが、プラウト版は全15曲に区別している。津川はプラウト版の番号付けに従っているゆえ、本稿も全15曲で記述する。日本語各曲タイトル(「1. 導入曲」, 「2. 叙唱 イエス」など)は、1964年、国立音楽大学定期演奏会プログラムの「歌詞」の記載を採用した。叙唱はレチタティーヴォ、詠唱はアリアを指す。新旧ヴォーカル・スコアの楽譜本体では、プラウト版と同一記載(“No. 1 INTRODUCTION”, “No. 2 RECIT. JESUS”など)のみとなっている。

通常、歌詞は台本の形で提示される。演奏会プログラムやCDブックレットでも、台本の形が掲載されるのが常である。しかし、作曲者が実際に台本に基づいて旋律を作り出す際には、しばしば単語を反復して用いる(レチタティーヴォなど例外はある)。ドイツ語の原語に即した旋律に、英語ないし日本語の訳詞をいかに当てはめているかを考察するために、表では、楽譜本体に従い、反復も含めて歌詞を提示する。とはいえ、すべてを書き下すと膨大な量になるので、アリアや合唱の一部は省略した。具体的には、第3曲イエスのアリアの後半(47小節以降)、第8曲二重唱の後半(46小節以降)、第10曲兵士たちの合唱の後半(41小節以降)、第11曲合唱の後半(兵士たちの合唱は80小節以降、弟子たちの合唱は124小節以降)、第14曲合唱の後半(兵士たちの合唱は23小節以降、弟子たちの合唱は55小節以降、イエスは58小節以降)、第15曲合唱「いざや、世をこぞりて」以下の後半(32~65小節)および「いざや、いざや」以下の後半(143小節以降)である。第6曲では、ソプラノ独唱(セラフ=セラフィム)と天使たちの合唱が同時に歌われる。独唱と合唱の間で単語の反復等が多少異なるが、表では合唱の歌詞に従った。

ドイツ語および英語の1音節に対し、日本語の2音節が当てられている箇所は、下線で示した。第3曲イエスのアリア後半の冒頭「Vater / ちちよ / Father」を例に挙げよう(【譜例1】)。1音符が、日本語の2音節で分割される。

逆に、ドイツ語および英語の2音節に対し、日本語の1音節が当てられている箇所は、音引きで示した。上記例に直接続く箇所「hinauf zu dir / いのーる / his prayer to Thee」を例に挙げ

よう(【譜例1】)。日本語の1音節が、2つの音符に当てられている。

なお、旧ヴォーカル・スコアでは、20ページ(第5曲セラフのアリア冒頭)の日本語訳歌詞が欠落しているので、新ヴォーカル・スコアの該当箇所から補足した。また、119ページ(第15曲)の日本語訳歌詞も欠落しているが、この部分は表では省略している。新旧ヴォーカル・スコアとも、114ページ(第15曲)の日本語訳歌詞が欠落しているが、終合唱の単独譜により補足した。

3.2. 全体の特徴と個別例

既に論証したように(星野、2022b)、終合唱の日本語訳に際して、津川はプラウト版(Beethoven, 1877)に従い、ライネケ版(Beethoven, 1890)も参照している。オラトリオ全訳に際しても、両者から触発を得たことが明らかである。

たとえば、第2曲イエスの第一声は、プラウト版英訳では“My Father, O my Father”という反復だが、津川はドイツ語の“Jehova, du, mein Vater!”に沿って「エホバ、わがちち」と訳している(【譜例2】)。一方、第4曲セラフの第一声「いざや」は、英訳の“Now tremble”に触発されたのであろう。ドイツ語は“Erzittre”のみである。また同様に、第13曲ペテロの冒頭歌詞「わがこころ」は、ドイツ語の“In meinen Adern”ではなく、英訳の“Mine inmost heart”に対応している。

終合唱の分析を通して筆者は、津川訳詞の秀逸さを具体例とともに高く評価したが、オラトリオ全訳は優れているとは言いがたい。終合唱(第15曲)が一般的な賛歌であり、簡潔明瞭な感嘆をリズムよく畳み掛ける日本語訳によって、輝かしいクライマックスを生み出すのに成功しているのに対し、第14曲まではストーリー性の強い内容である。日本語の性格ゆえに訳詞では単語数が極端に少なくなり、物語も心情も伝わりにくい。また、日本語として不自然な高低アクセントや、音節の長さも散見され、全体的に歌いづらく、聞き取るのも至難である。

以下、僅かだが、例を挙げて考察しよう。

(1) 「わがちち」(第2曲冒頭)【譜例2】

「わ」と「がちち」の間が休符で分けられている。したがって、日本語訳では休符を無視して一息に歌う工夫が必要となるが、どうしても高低アクセントが不自然である。旋律の作りは、強拍(1拍目)にドイツ語の親称への呼びかけ(“du”)を置き、休符を経て、最高音(2点ソ)に達し、「我が父(“mein Vater!”)」がドイツ語アクセントに自然に沿って歌われる。あえて代替案を記すのなら、英訳(“O”)と同様に感嘆詞を用いて、「おお、ちちよ」としたほうが、効果的に響くのではないだろうか。

(2) 「くるしみのとききたれり」(第2曲冒頭続き)【譜例2】

オーケストラも声楽との合わせには相当、苦勞したようである。2.2.1.(3)にて述べたように、1964年の国立音楽大学定期演奏会に参加したティンパニ奏者は、ノヴェロ版とカルマス版の両方に書き込みをしている。第2曲6小節では、イエスのレチタティーヴォの一文末に、ティンパニがソロで弱音の連打を重ねる。ノヴェロ版に「いたれり」と記されているのは、練習初期に耳で聞き取ったままを書き入れたのだろう。一方、カルマス版には「(くるしみのとききたれり)」と、おそらくは確認の上、正しい歌詞が記されている。ドイツ語、英語では「苦しみ Leiden/suffer」という重みのある語にティンパニの入りを合わせる音楽的必然性があるのに対

し、日本語では動詞の語尾に当たるため、合わせづらかったろう。

(3) 「あけぼのもちかし」(第14曲終わり)【譜例3】

第14曲終わり、イエスの最後の言葉「あけぼのもちかし、われはこの世にかてり」は、弦全奏によって重複される。計9冊のパート譜(Vn I, 3; Vn I, 7; Vn II, 1; Vn II, 3; Vn II, 4; Vn II, 6; Vla, 1; Vla, 3; Vla, 4)に該当する書き込みが見られるが、「あけぼの」や「4つ」という注記のほか、「あけぼのもち」という書き込みが多く、合わせにくかった戸惑いとともに、訳詞を面白がっていた様子(あけぼの餅?)も窺える。

4. 結語

上演機会が極端に少ない《オリーブ山のキリスト》について、知られざる日本語訳とその上演記録を明るみに出したところで、本稿の出発点となった津川の記述に立ち帰ろう。津川は《オリーブ山のキリスト》を「戦前に」東京オラトリオ協会のため全訳した。それが当時、なぜ上演されなかったのだろうか。また、戦後の上演が津川ではなく、岡本の指揮、主導によったのはなぜか。

4.1. オラトリオ協会と日本語訳詞

東京オラトリオ協会は、ベネディクト聖歌団を母胎に1925年に活動を始めた混声合唱団である。津川は後年、1923年のベネディクト聖歌団の誕生を「東京オラトリオ協会の発足」として記述している。すなわち、「関東大震災で、焼土と化した東京の真ん中で、教会音楽を演奏する団体を作ろうという企てが、神田のYMCAで行われた。そして、このために各教会へ向けて招待状が発せられた。このとき第一に馳せ参じてくれたのは、当時一家が富士見町教会の信者で、留学から帰ったばかりの、堀内敬三氏であり、進んで伴奏も引き受けてくれた。これが東京オラトリオ協会の発足であり、その母胎となったのは、罹災者の救済事業に熱中していた『イエスの友』の人たちが中心であった」(津川、1964、p.384)。

音楽之友社の設立者、NHKラジオ番組「音楽の泉」初代解説者として著名な堀内敬三(1897～1983)は、数多の優れた作詞、作曲、訳詞でも知られる。堀内との協同について津川は次のように続ける。「年に2回ずつの定期をそれから開き、今日のような大曲・名曲主義ではなく、できるだけ素人のクリスチアンの手に合うような曲を探しあてて、はじめは堀内氏の手を煩わし、のちには堀内氏の指導によって、わたくしの手で邦訳し、できるだけ演奏する側にも、聞き手の側にも判りやすく、一人でも多く良い教会音楽の支持者を作りたいと思って、そのようにしたのである。われわれの仕事は横浜・神戸・仙台・札幌に同様の団体を生み出させた」(津川、1964、pp.384-385)。

津川はここで、「大曲・名曲」ではなく「素人」用の小品に取り組んだと記しているが、実際には、東京オラトリオ協会は1920年代から30年代にかけて大規模なオラトリオを、堀内ないし津川の邦訳によって、次々と日本初演した(津川、1933、pp.189-192; 津川、1964の全体)。メンデルスゾーンのアラトリオを例にとると、《エリヤ》は「早くから神戸・東京等で外人のアラトリオ協会が英語で演奏した」(津川、1964、p.179; ほかにp.382; 津上、2022)のに対し¹²、《パウロ》と《キリスト》は「筆者の指揮のもとに東京オラトリオ協会が初演した」(津川、1935、p.338)。《キリスト》の初演は「1933年……筆者の邦訳」によった(津川、1964、p.181)。《パウ

口》については年代不明だが、津川は「われわれが戦前に、堀内敬三氏に邦訳してもらって、全曲を演奏したときには、集まった2千人の聴衆のなかから、感銘をうけて、バプテスマを受ける決心をした人が出た」と繰り返し述べている(津川、1964、p.178; ほかに津川、1935年、p.338)。

『教会音楽5000年史』の「結論」において、津川は、「日本のプロテスタント教徒は、聖書を日本語に訳して用い、讚美歌を日本語に直して歌った」こと、「キリスト教のもつ思想や感情が、それによって、近代の日本人の一部に、移入されたこと」を振り返る。そして、「これに加えるのに日本語に訳されたモテットやアンセムやカンタータやオラトリオやミサが歌われて、これが大衆の心を動かし、福音の喜びを伝えるにいたったならば、日本の国を一層幸福にしていくのに役立つだろう」(津川、1964、pp. 388-389)と、日本語訳で歌う目的を明確にしている。

4. 2. 岡本敏明と国立音楽大学

東京オラトリオ協会の活動は、第2次世界大戦の末期まで続いた。プロテスタント音楽家としての信念に貫かれた津川であったが、「一方音楽的技術の面で、幾らか不満を感じ」、「音楽学校出身者程度の声楽の素養ある者を集め」た「20人前後の」小規模合唱へと「戦争直前ごろから」期待を移す。芸術性と信仰のバランスをとる難しさに加え、東京オラトリオ協会とYMCAの関係はもともと不安定であり(斉藤、1980a、pp. 34, 37; 斉藤、1980b、pp. 202, 306)、戦況が悪化するなか解消に至ったのだろう。

戦後も存続した、あるいは戦後に新たに結成された、キリスト教精神によるアマチュア合唱団と良い関係を築きつつ、高度成長期に目覚ましい発展をみせた音楽大学において合唱の向上に大きく貢献したのが岡本敏明だった。上述したように、新進の愛弟子を横浜オラトリオ協会や東京YMCA合唱団に送り込み、レパートリーを共有した上で、自らの拠点である国立音楽大学の定期演奏会にて大編成のオラトリオ上演を実現した。小編成のアマチュア合唱団では時間をかけて練習し、内容の理解を深めたり、音大では若者たちに作品の意義を伝えながら、技術的な高みを目指したろう。

合唱は、声楽科ではなく教育科が中心だったという¹³。いずれにせよ、大勢の若者たちによるハーモニーが戦後復興の象徴となったことは想像に難くない。ソリストたちは、後に日本の楽壇を率いる逸材揃いである。オペラ界での活躍が顕著だが、当時は原語のみならず、翻訳オペラ上演も少なくなかった。しかし、1980年代を境に、日本語上演は激減する。国際化とともに愛好家や聴衆の間でも本場志向が高まり、音楽専門教育においては原語の習得に力が注がれる。津川と岡本の死後、オラトリオの日本語訳を手掛けるカリスマ的指導者はいなくなった。

4. 3. 《オリーブ山のキリスト》の特殊性

最後に、《オリーブ山のキリスト》の日本語訳上演が、津川の邦訳完成後に速やかになされなかった原因を考察しよう。声楽の難易度が極めて高いため、技術的難しさに原因を帰す向きもあるかもしれない。しかし、1920年代から30年代にかけて日本人による混声合唱団が実力をつけ、本格的な大作オラトリオに挑戦できるようになっていたことは津川の回想のみならず、最近の研究でも明らかにされている(津上、2023)。技術面ではなく、作品の内容にこそ、原因は見いだされるべきである。

《オリーブ山のキリスト》全訳の正確な成立年代は不明だが、戦前、そして終合唱の邦訳(1935年)後と津川は述べている。1930年代後半になると、軍国主義化が急激に進み、合唱でも戦意

を高揚するもの、あるいは、厚生運動の性格が強いものが好まれるようになる。それに対して、《オリーブ山のキリスト》では、死を目前としたイエスが苦悩を率直に吐露する。第5、6曲、そして終結で「勝利」が高らかに歌われるとはいえ、「死の苦しみ」、「悩みと恐れ」、「悲しみ」の描写は劇的に迫り来る。さらに、イエスを捕えに来た敵に立ち向かい、「我が心、正義と真理の怒りに燃ゆ」、「仇を報いん」と憤る弟子ペテロに対し、イエスが「剣を鞘に収めよ」と諫め、「仇を許せ、仇を愛せよ」と説く内容は、時局に全くそぐわなかったことは明白である。

1954年の国立音楽大学による演奏会プログラムに、津川が「敗戦後の日本のみじめな姿と、至高なイデエのために殉じたベートーヴェンを思いあわせて、うたた感慨深きものがある」と寄せた時、それは単に戦後復興を念頭に置いた発言ではなかったろう。津川訳が戦前に上演されなかったこと、さらに、津川が戦時中に精魂こめて執筆した『独逸国民と音楽生活』と『民族解放の歌』が、戦後、GHQにより音楽書のなかでは僅かな焚書扱いとなったことを背景に考慮すると、津川はここに自らの「至高なイデエ」を「思いあわせ」たに違いないと思われる。「国家を……発展せしむる為の重大なる文化活動として」音楽を位置付け、人間の教育において音楽の「育成と奨励とに努力」（津川、1942a, pp.8, 10）する姿勢は、本人にしてみれば戦前、戦中、戦後を一貫していたはずである。

昭和の合唱史、音楽と戦争と国家の関係を再考するためにも、津川主一は不可欠の研究対象である。今後、他のオラトリオや宗教曲の日本語訳上演を視座に取り入れた広範な研究が課題となる。

註

- 1 Hoshino, Hiromi, „Beethovens *Chor der Engel*: Eine Chortradition in japanischen Mädchenschulen mit christlichen Wurzeln“, im Rahmen des 10. Bonner Humboldt-Preisträger-Forums „Beethovens ‚Geistiges Reich‘: ‚Symbole des Vortrefflichen‘ in der Kunst und die kulturelle Politik des Widerstandes“ (Bonn, 23. Oktober 2021) [口頭発表]
- 2 星野宏美『『天使の合唱』、あるいは『ベートーヴェンのハレルヤ』——《オリーブ山上のキリスト》終合唱の日本における受容』、2022年11月26日、西南学院大学、日本音楽学会 第73回全国大会口頭発表。『音楽学』68 (2022)、p.158に要旨収録。
- 3 『ベエトウフエン作曲 ハレルヤ 三部合唱 聖劇「橄欖山」終曲 津川主一訳詞 ED. SINKYO, No. 566』（東京：シンキヤウ社、1935年）。津川はオーケストラ伴奏付混声4部合唱をピアノ伴奏付き女声3部合唱に編曲し、日本語訳詞を付けて出版した。
- 4 国立音楽大学音楽資料課、とくにオーケストラ・ライブラリご担当の石川泰子氏、また、仲介の労をとってくださったベートーヴェン研究者の沼口隆先生（東京芸術大学准教授）に感謝申し上げます。2022年12月20日に沼口先生とともに訪問した。
- 5 ヴォーカル・スコア2種をご提供いただいた1964年の演奏会のソリスト、伯田好史先生（元国立音楽大学教授）に感謝申し上げます。
- 6 ウェブ上のフォームおよびメールでの問い合わせに、丁寧に回答いただいた横浜オラトリオ協会合唱団に感謝申し上げます。
- 7 膨大な量のプログラムに改めて目を通し、また恩師にあたる岡本敏明について貴重な生の情報を伝えてくださった江崎公子先生（元国立音楽大学助教授）に感謝申し上げます。
- 8 演奏記録および所蔵楽譜を調査してくださった公益財団法人東京交響楽団広報本部の伊藤瑛海氏に感謝申し上げます。
- 9 合唱指揮にあられた近藤直子先生から当時の回想を伺った。記して感謝申し上げます。津川訳上演について近藤先生は現時点で知らず、当時、話題になったか記憶にないという。
- 10 Bach Collegium Japan チャンネルYoutubeのChristus am Olberge (Beethoven) excerpts で確認す

ると、当日テノール1名が欠席している(2023年10月22日試聴)。

- 11 詳細丁寧な調査の労をとってくださった国立音楽大学演奏部の諸井重孝氏に感謝申し上げます。
- 12 フェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ(1809~1847)のオラトリオ3作はドイツ語台本に基づくが、《エリヤ》は作曲家指揮下にイギリスで初演されたこともあり、初演時の英訳歌詞が広く普及した。詳しくは、星野、2022aを参照のこと。
- 13 当時の様子を聞かせてくださった伯田博子先生(元国立音楽大学助教授)に感謝申し上げます。

【参考文献】

- 青木靖子、江崎公子(2007). 『昭和期の合唱運動1——岡本敏明所蔵音楽会プログラムの整理を通して』ぎょうせい.
- 星野宏美(2022a). 『メンデルスゾーンの宗教音楽——バッハ復活からオラトリオ《パウロ》と《エリヤ》へ』音楽之友社.
- 星野宏美(2022b). 『『天使の合唱』、あるいは『ベートーヴェンのハレルヤ』——《オリーブ山上のキリスト》終合唱の日本における受容』、『音楽学』68、158.
- 丸山忠璋(2016). 『津川圭一の生涯と業績——神と人と音楽とに仕えて』スタイルノート.
- 斉藤実(1980a). 『東京YMCA100年の歩み——1880年~1979年』東京キリスト教青年会.
- 斉藤実(1980b). 『東京キリスト教青年会百年史』東京キリスト教青年会.
- 津上智実(2022). 『歌の系譜——戦前の東京コーラル・ソサエティ』『神戸女学院大学論集』69、91-107.
- 津上智実(2023). 『ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演——その実態と成立の経緯』、『音楽学』68、115-129.
- 津川圭一(1933). 『音楽講座第7篇——合唱樂及指揮法』文藝春秋社.
- 津川圭一(1935). 『讚美歌作家の面影』教文館.
- 津川圭一(1942a). 『獨逸國民と音楽生活』新興音楽出版社.
- 津川圭一(1942b). 『民族解放の歌』教文館.
- 津川圭一編(1953). 『合唱名曲選集 14 混声編』音楽之友社.
- 津川圭一編(1960). 『合唱名曲選集 26 男声篇』音楽之友社.
- 津川圭一編(1963). 『合唱名曲選集 28 女声篇』音楽之友社.
- 津川圭一(1964). 『教会音楽5000年史』ヨルダン社.
- 『横浜オラトリオ協会合唱団90周年記念誌』(2018). 私家版.

【演奏会記録】

- 小川昂編『新編日本の交響楽団 定期演奏会記録1927-1971』、『新編日本の交響楽団 定期演奏会記録追補1982-1991』、『新編日本の交響楽団 定期演奏会記録1992-2000』(民音音楽資料館、1983/1992/2002年)
- 『東京芸術大学百年史 演奏会編』全3巻(音楽之友社、1990/1993年)
- 『朝日新聞クロスサーチ』(朝日新聞オンライン記事データベース)
- 『ヨミダス歴史観』(読売新聞社オンライン記事データベース)

【参考楽譜】(本文中ではBeethovenと出版年号を並記して引用する)

- Engedi, or, David in the Wilderness, a sacred drama, the music by Louis van Beethoven, The words principally selected from the Scriptures by Henry Hudson. London: Novello, [1858].*
- Ludwig van Beethoven's Werke. Vollständige kritisch durchgesehene überall berechnete Ausgabe. Serie 19. Kirchenmusik. No. 205. Christus am Oelberge. Op. 85. Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1863].*
- The Mount of Olives, An Oratorio, Composed by L. van Beethoven, Edited, and the Pianoforte*

- Accompaniment revised, by Ebenezer Prout, The English Version newly translated and adapted by Rev. J. Troutbeck, D. D., London: Novello; New York: Gray, [1877].
- Ludwig van Beethoven, *Christus am Oelberge, Oratorium für drei Solostimmen, Chor und Orchester, op. 85*, Klavierauszug von Carl Reinecke, Leipzig: Breitkopf & Härtel, [1890]. (Volksausgabe, No. 1415)
- Beethoven, Christus am Oelberge, Oratorium, opus 85*, hrsg. von Anja Mühlenweg, München: Henle, 2009. (Partitur der Gesamtausgabe, Beethoven Werke, Abteilung VIII, Geistliche Musik, Band 1)
- Ludwig van Beethoven, Christus am Oelberge, Oratorium, op. 85, Soli, Coro ed Orchestra*, Text von Franz Xaver Huber, English version by John Troutbeck, Klavierauszug von Alfred Dörffel (Revision von Claudia Seidl), hrsg. von Clemens Harasim, Stuttgart: Carus, 2019. (Beethoven vocal Urtext)

ドイツ語原語 (Huber)	日本語訳 (津川圭一)	英訳 (Troutbeck)
<p>No. 1. Introduzione.</p> <p>Jesus.</p> <p>Jehova, du, mein Vater! o sende Trost und Kraft und Stärke mir! Sie nahet nun, die Stunde meiner Leiden, von mir erkoren schon, noch eh' die Welt auf dein Geheiß dem Chaos sich entwand.</p> <p>Ich höre deines Seraphs Donnerstimme, sie fordert auf, wer statt der Menschen sich vor dein Gericht jetzt stellen will.</p> <p>O Vater! Ich erschein' auf diesen Ruf. Vermittler will ich sein, ich büße, ich allein, der Menschen Schuld.</p> <p>Wie könnte dies Geschlecht, aus Staub gebildet, ein Gericht ertragen, das mich, mich, deinen Sohn, zu Boden drückt!</p> <p>Ach sieh! wie Bangigkeit, wie Todesangst mein Herz mit Macht ergreift! Ich leide sehr, mein Vater! o sieh! ich leide sehr, erbarm' dich mein!</p> <p>ARIA.</p> <p>Meine Seele ist erschüttert von den Qualen, von den Qualen, die mir dräun. Schrecken fasst mich, und es zittert grässlich schaudernd mein Gebein. Wie ein Fieberfrost ergreift mich die Angst, die Angst beim nahen Grab, und von meinem Antlitz träufet statt des Schweisses Blut herab, statt des Schweißes Blut, Blut herab.</p> <p>Vater! tief gebeugt und kläglich fleht dem Sohn hinauf zu dir, zu dir! Deiner Macht ist alles möglich, nimm, nimm den Leidenskelch von mir, nimm den Leidenskelch von mir!</p>	<p>1. 導入曲</p> <p>2. 叙唱 イエス</p> <p>エホバ、わがちち、信どちからあたへませ！ くるみのとききたれり。なかおほほせに、われははたがひて、ここに立てり。</p> <p>きげや、みつかいかわたれり、「人にかよひ、さばきの座に、いづざるものはたぞ、</p> <p>ちちよ！ いざわれゆかむ、ひとの世をば、すくふために、われゆかむ。</p> <p>このはげしき、くるしみを、よわきひとに、ああ、たふるすべありや。</p> <p>みよ、おそれと、なやみに、われとらはる。 わがちち！ ちからも、うする、このわれを、たすけよ！</p> <p>3. 詠唱 イエス</p> <p>わがたまわがななき、手あしは、みよ、うちふるふ、ちかづきせまる、なやみとおそれに。 ひとのくるしみを、おもひ、われたえがたし。 血しほのあせは一、ひたひをながる、ひたひを、ああ、ながる。</p> <p>ちちよ、われたえがたく、なれにいのーる、ああ、みころならば、いま、このさかつきを、とり去りたまへ。</p>	<p>No. 1. INTRODUCTION.</p> <p>No. 2. RECIT. JESUS. (TENOR.)</p> <p>My Father, O my Father, be Thou my comfort, give me strength to bear! Now is the hour approaching when I suffer. I chose to meet this hour, before the world, at Thy command, in order newly stood.</p> <p>I hearken to the voices of Thy Seraphs; they cry aloud, Who will, in place of man, before Thy judgement-seat appear?</p> <p>O Father! I appear at this their call. A Saviour will I be, atoning, I alone, for all mankind.</p> <p>How could this feeble race, from dust created, ever meet a judgment, which I, Thine only Son, can scarce endure?</p> <p>Behold, how fearfulness, how pains of death, upon my soul have seiz'd. My heart is faint, my Father! Behold, my heart is faint; O comfort me!</p> <p>No. 3. ARIA.</p> <p>All my soul within me shudders, At the torments, at the torments drawing near; And my members greatly tremble, With an overwhelming fear. I am full of heavy sorrow, At the thought, the thought of mortal pain; Drops of blood, the sweat of anguish, From my forehead fall like rain, from my forehead fall, fall like rain.</p> <p>Father! bow'd with fear and sorrow, Lifts Thy Son his prayer to Thee; By Thy power to save unbounded, Take, take this cup away from me, take this cup away from me.</p>

<p>No. 2. Seraph. Erzitter, Erde! Jehova's Sohn liegt hier, sein Antlitz tief in Staub gedrückt, vom Vater ganz verlassen, und leidet unennbare Qual. Der Gürtel er ist bereit, den martervollsten Tod zu sterben, damit die Menschen, die Menschen, die er liebt, vom Tode auferstehen und ewig ewig leben!</p>	<p>4. 叙唱 天使セラフ いざや、あめつちのおのけ！ みよや！ 地のうへに、かみのひとりごは、くるしみなやめり。たふとき、かみの子、死にのぞみたまふー、あいするー、よびとをすくひ、とはのいのちを、得させんために。</p>	<p>No. 4. RECIT. SERAPH. (SOPRANO.) Now tremble, Nature for this God's own Son! Behold him! On the earth he lies; of his Father quite forsaken; enduring unspeakable pain. The Holy One! He is prepar'd a bitter cruel death to suffer; that so the sinners, the sinners whom he loves, from death may be deliver'd, and enter life eternal.</p>
<p>ARIA. Preist, preist des Erlösers Güte, preist, Menschen, seine Huld! Er stirbt für euch aus Liebe, für euch aus Liebe, sein Blut, sein Blut tilgt eure Schuld. Preist, Menschen, preist seine Huld! O Heil euch! Heil euch, ihr Erlösten, euch winket, euch winket Seligkeit, euch winket Seligkeit, wenn ihr getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid, getreu in Liebe, in Glaub' seid, getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid, wenn ihr getreu in Liebe, in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid. Doch weh! Die frech entehren das Blut, das für sie floss, sie trifft der Fluch des Richters, Verdammung ist ihr Los, Verdammung, Verdammung, Verdammung ist ihr Los, Verdammung, Verdammung, Verdammung ist ihr Los.</p>	<p>5. 詠唱 たたへよ、あがない。うたえよ、めぐみ。やさしくきみは、逝きたもうて。みふかきひとびと、すくう、すくうため。 あがないはれしものよ、しよりと、みめぐみーは、なれがものぞ。あい、信仰、希望、うしなはざれ、うしなはざれ、うしなはざれ、あい、信仰、希望、うしなはざーれ。 されど、ながされし、たふとき血を、あなだるものは、さばきをうけん、かみの、さばき、さばきをうけん、さばき、さばきをうけん。</p>	<p>No. 5. ARIA. Praise, praise the Redeemer's goodness; Mankind, proclaim His grace. He dies in loving kindness, in loving kindness, To save, to save your sinful race, Mankind, proclaim, proclaim His grace. O triumph, triumph, all ye ransom'd, O triumph, Ye shall to bliss attain, Ye shall to bliss attain, If ye in love unfaithful, In faith and hope, remain. In love unfaithful, in faith and hope, remain. If ye in love unfaithful, In love and faith and hope, remain. But woe to those despising The blood for them pour'd out, A curse from God awaits them. And judgment is their lot, and judgment, and judgment, and judgment is their lot, and judgment, and judgment is their lot.</p>
<p>CHOR der Engel. [und] Seraph. O Heil euch, ihr Erlösten! o Heil euch! euch ihr Erlösten! Euch winket Seligkeit. O Heil, o Heil euch! O Heil euch, ihr Erlösten! Euch winket, euch winket Seligkeit. Wenn ihr getreu in Liebe, getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid, wenn ihr getreu, getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid.</p>	<p>6. 独唱(セラフ)と天使たちの合唱 あがないはれしー、ものよ、みめぐみと、しよりはげになれがもの！ あがないはれしー、ものよ、勝利は、なれがものぞ。あい、信仰、希望、うしなはざれ、うしなはざれ、あい、信仰、希望、うしなはざれ。</p>	<p>No. 6. SOLO [SERAPH,] AND CHORUS. O triumph, all ye ransom'd, O triumph, all all ye ransom'd. Ye shall to bliss attain, O triumph, triumph, O triumph, all ye ransom'd, O triumph, triumph, O triumph, ye shall to bliss attain, If ye in love unfaithful, in love unfaithful, In faith and hope, remain. If ye in love in love unfaithful, In faith and hope, remain.</p>

<p>Doch weh! doch weh! die frech entehren das Blut, das für sie floss, das Blut, das für sie floss. Verdammung ist ihr Los. Doch Heil euch, ihr Erfösten, wenn ihr getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid, o Heil euch, o Heil euch, wenn ihr getreu in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid.</p> <p>Doch weh! die frech entehren das Blut, das für sie floss; sie trifft der Fluch, der Fluch des Richters, sie trifft der Fluch, der Fluch des Richters! Verdammung ist ihr Los. Verdammung ist ihr Los, Verdammung ist ihr Los. Sie trifft der Fluch des Richters, sie trifft der Fluch, der Fluch, der Fluch des Richters, Verdammung ist ihr Los!</p> <p>Doch Heil euch, wenn ihr getreu, getreu in Liebe, in Liebe, in Glaub' und Hoffnung seid, euch winket, winket Seligkeit. Euch winket Seligkeit, euch winket Seligkeit, o Heil! o Heil euch!</p>	<p>されど、たふとき血を、あなだるもの、あなだるもの、さばきをうけん。しようりとめぐみは、あい、信仰、希望、うしなはざれ、うしなはざれ、うしなはざれ、しようり、めぐみ、あい、信仰、希望、うしなはざれ。</p> <p>されど、されど、ながされし、たふとき血を、あなだるもの、ものは、あなだるものは、さばきをうけん、さばきをうけん、さばきをうけん、あなだるものは、その血を、あなだるものは、さばきをうけん。</p> <p>いざや、あい、信仰、信仰、希望、希望、うしなはざれ、勝利、勝利、めぐみ、なれがものぞ、なれがものぞ、しようり、勝利!</p>	<p>But woe But woe to those despising The blood for them pour'd out, the blood for them pour'd out, For judgment is their lot, O triumph, all ye ransom'd, If ye in love unfaithful, In faith and hope, remain, in love unfaithful, In faith and hope, remain, O triumph, If ye in love unfaithful, In faith and hope, remain, in love unfaithful, In faith and hope, remain, in love unfaithful, In faith and hope, remain,</p> <p>But woe, but woe to those despising The blood for them pour'd out, A curse from God, from God awaits them, a curse from God awaits them, And judgment is their lot, and judgment is their lot, and judgment is their lot, their lot, A curse from God awaits them, a curse from God, a curse from God awaits them, And judgment is their lot.</p> <p>Ye triumph, If ye in love, in love unfaithful, unfaithful, In faith and hope, remain, Ye shall, ye shall to bliss attain, Ye shall to bliss attain, ye shall to bliss attain, O triumph, triumph!</p>
<p>No. 3. Recitativo. Jesus. Verkündet, Seraph, mir dein Mund Erbarmen meines ew'gen Vaters? Nimmt er des Todes Schrecknisse von mir? Seraph. So spricht Jehovah: Eh nicht erfüllet ist das heilige Geheimnis der Versöhnung, so lange bleibt das menschliche Geschlecht verworfen und beraubt des ew'gen Lebens.</p>	<p>7. 叙唱 イエスと天使セラフ (イエス) みつかひよ、なれはちのあいを つたへ、おそれをのぞきうるや! (セラフ) かみのたまふ。「死のくるしみ、あがなひとなるまでは一、ひとびとはすてられて、とこしへのいのちを得じ。」</p>	<p>No. 7. RECIT. JESUS. Canst thou, O Seraph, now declare the mercy of my heav'nly Father? Will He remove the fear of death from me? SERAPH. Thus saith Jehovah: Until is quite fulfill'd the Mystery of death to make atonement, So long the race of man is cast away, depriv'd of any part in life eternal.</p>
<p>DUETTO. Jesus. So ruhe denn mit ganzer Schwere, mit ganzer Schwere auf mir, mein Vater, dein Gericht. Gress über</p>	<p>8. 二重唱 イエスと天使セラフ (イエス) しからばわがちちよ、みさばきの、おもいに、たへん、たへん。くるしみなにか</p>	<p>No. 8. DUET. JESUS. On me, then fall Thy heavy judgement, Thy heavy judgement, Its weight, my Father, let me bear, On</p>

<p>mich den Strom der Leiden, nur zürne Adams Kindern nicht, nur zürne Adams, Adams Kindern nicht!</p> <p>Seraph. Erschüttert seht' ich den Erhabnen, den Erhabnen in Todesleiden eingehüllt. Ich bebe, und mich selbst, mich selbst umwehen die Grabeschauer, die er fühlt, mich selbst umwehen die Grabeschauer, die er fühlt;</p> <p>[Seraph. und] Jesus. Gross sind die Qual, die Angst, die Schrecken, die Gottes Hand auf ihn/mich ergiesst, doch grösser noch ist seine/meine Liebe, mit der sein/mein Herz die Welt umschliesst.</p>	<p>あらん、アダムのすゑをば、ゆるさしたもふならば。</p> <p>(セラフ)かなしみにつかれし、つかれし、かみのみこをみる。われもたへがたくなりぬ。そのなやみおもひ、そのなやみおもひ一ひいて一よ。</p> <p>(二重唱)くるしみ、なやみは一、ふかくあると一も、ちちななるかみのあはれみは、さらにおいなり。</p>	<p>me be pour'd the stream of anguish, If Thou but Adam's children spare, if Thou but Adam's, Adam's children spare.</p> <p>SERAPH. Downstricken do I see the Great One, see the Great One; For grief and pain his spirit fails; I tremble, and myself, myself am feeling The mortal fear which him assails, myself am feeling the mortal fear which him assails.</p> <p>[DUET.] Though great the pain, the grief, the terror, From God's own hand on him/me outpour'd; Yet greater, greater far the love and mercy Wherewith his/my heart doth man regard.</p>
<p>No. 4. Recitativo. Jesus. Willkommen, Tod! den ich am Kreuze zum Heil der Menschheit blutend sterbe! O seid in eurer kühlen Gruft gesegnet, die ein ew'ger Schlaf in seinen Armen hält, ihr werdet froh zur Seligkeit erwachen.</p>	<p>9. 叙唱 イエス 世びのためならば、いけにえとならん。おお、おぐらさおくつきに、わびしくも、ねむるものよ、よろこべ、醒むるとき来ぬ。</p>	<p>No. 9. RECIT. JESUS. The welcome, death, which I shall suffer, for man's redemption, on the cross. Oh! ye who in the cold, cold grave are lying, whom eternal sleep within its arms holds fast, Ye shall rejoice, to bliss ye shall awaken.</p>
<p>CHOR der Krieger. Wir haben ihn gesehen nach diesem Berge gehen, entfliehen kann er nicht, entflieh'n, entfliehen kann er nicht, ja seiner wartet das Gericht, ja seiner wartet das Gericht.</p>	<p>10. 合唱 兵士たち かれをみいだし、しかととらへよ、のがすなかれ、いざ、いざ、のがすなかれ。いつはりものをたふせ、とくたふせ、たふせとくたふせ。</p>	<p>No. 10. CHORUS OF SOLDIERS. We surely here shall find him, And take, and safely bind him; Escape is quite in vain, escape, escape, escape is quite in vain, Yea this deceiver shall be slain, Yea this deceiver shall be slain.</p>
<p>No. 5. Recitativo. Jesus. Die mich zu fangen ausgezogen sind, sie nahen nun. Mein Vater! o führ' in schnellem Flug der Leiden Stunden bei mir vorüber, dass sie fliehn, rasch, wie die Wolken, die ein Sturmwind treibt, an deinen Himmeln ziehn. Doch nicht mein Wille, nein, dein Wille nur geschehe.</p>	<p>11. 叙唱と合唱 イエスと兵士たちと弟子たち (イエス)とらへんとするものは、ちかづけり。ちちよ、このときをば、われより去らしめ、みそれのかげな一たは一るかに、とびゆかせよ。あゝ、されど、したががはん、みむねに。</p>	<p>No. 11. RECIT. AND CHORUS JESUS. (TENOR.) They who take me have been hither sent are drawing near. My Father, O let the hours of pain in rapid flight pass over me; let them fly swift as the clouds, by a storm-wind driven, across the sky are borne. Yet, not my will, nay, Thine rather, be accomplish'd.</p>

<p>CHOR der Krieger. Hier ist er, hier ist er, der Verbannte, der sich im Volke kühn der Juden König nannte, hier ist er, der Verbannte, der sich im Volke kühn der Juden König nannte; ergreift und bindet ihn, ergreift und bindet ihn, ergreift und bindet ihn, ergreift und bindet ihn!</p> <p>CHOR der Jünger. Was soll der Lärm bedeuten? es ist um uns geschehen! umringt von rauhen Kriegern, wie wird es uns ergehn! ach! wie wird es uns ergehn!</p> <p>Erbarmen, ach Erbarmen! Erbarmen, ach Erbarmen, es ist um uns, um uns geschehn! es ist um uns, ach! um uns geschehn!</p>	<p>(兵士たち) みよや、みよや、みよや、かれをば。きみにかりはり、をさめんといへり。みよや、かれをば、きみにかりはり、をさめんといへり。しかとどらへよ、しかとどらへよ、しかとどらへよ。</p> <p>(弟子たち) さばきはなにごぞ、あだせまれるか。きけ、ものふの、かのをたけび。のがるるすべなし。</p> <p>あはれみたまへ、あはれみたまへ、あだはちかづげり、みよ、あだは、ちかづげり。</p>	<p>CHORUS OF SOLDIERS. Behold him! behold him! The deceiver, Who dares to say that he is King instead of Caesar, Behold him, The deceiver, Who dares to say that he is King instead of Caesar. Then seize and bind him fast, then seize and bind him fast, then seize and bind him fast, then seize and bind him fast.</p> <p>CHORUS OF THE DISCIPLES. (TENORS.) What means this crowd and tumult? Our deadly foes are nigh us! with cruel soldiers round us, Ah, whither can we fly? 'Tis in vain, we cannot fly!</p> <p>Have mercy, O have mercy, have mercy, O have mercy, our deadly foes, our foes are nigh, our deadly foes, Ah! our deadly foes are nigh.</p>
<p>No. 6. Recitativo.</p> <p>Petrus. Nicht ungestraft soll der Verwegnen Schaar dich Herrlichen, dich, meinen Freund und Meister, mit frecher Hand ergreifen!</p> <p>Jesus. O lass dein Schwert in seiner Scheide ruhn; wenn es der Wille meines Vaters wäre, aus der Gewalt der Feinde mich zu retten, so würden Legionen Engel bereit zu meiner Rettung sein.</p>	<p>12. 叙唱 使徒ペテロとイエス</p> <p>(ペテロ) みかみの、いかりの手は、わが主よ、ともよ、きみよ、のぞまでやむべき。</p> <p>(イエス) つるぎを、さやにおさめよ。あだより、すくはるるが、かみーの、みむねならば一、十二軍のみつかひは、天よりつかひはされん。</p>	<p>No. 12. RECIT.</p> <p>PETER. Not unchastis'd shall this audacious band on Thee, O Lord, Thee, my Friend and Master, their shameless hands be laying.</p> <p>JESUS. Oh, let thy sword within its sheaths remain. Were it the will of my Heavenly Father from out the hands of these my foes to save me, more than twelve legions of His angels would now be sent for my defence.</p>
<p>TERZETTO.</p> <p>Petrus. In meinen Adern wühlen gerechter Zorn und Wuth, gerechter Zorn und Wuth; lass meine Rache kühlen lass meine Rache kühlen in der Verwegnen Blut, in der Verwegnen Blut, lass meine Rache kühlen in der Verwegnen Blut!</p>	<p>13. 三重唱</p> <p>(ペテロ) わがころ、げに、正義と真理の、いかりにもゆ。なをしひたぐる、よこしまの手に、あだをむくいん、あだをむくいん、よこしまの手に、あだをむくいん。</p>	<p>No. 13. TRIO.</p> <p>PETER. Mine inmost heart is burning With righteous wrath and zeal, with righteous wrath and zeal, I would that all my vengeance, I would that all my vengeance Thine impious foes might feel, Thine impious foes might feel, I would that all my vengeance thine impious foes might feel.</p>

<p>Jesus. Du sollst nicht Rache üben, ich lehrt' euch blos allein, die Menschen alle lieben, dem Feinde gern verzeihn, ich lehrt' euch blos allein, die Menschen alle lieben, dem Feinde, dem Feinde gern verzeihn!</p> <p>Seraph. Merk' auf, o Mensch, und höre: nur eines Gottes Mund macht solche heil'ge Lehre der Nächstenliebe kund, nur eines Gottes Mund macht solche heil'ge Lehre der Nächstenliebe kund, merk' auf, o Mensch, merk' auf, o Mensch, und höre!</p> <p>Seraph. und Jesus. O Menschenkinder fasset dies heilige Gebot: Liebt jenen, der euch hasset, nur so gefallt ihr Gott!</p> <p>Petrus. In meinen Adem wühlen, wühlen gerechter Zorn und Wuth, in meinen Adem, in meinen Adem wühlen gerechter, gerechter Zorn und Wuth.</p> <p>Petrus. Lass meine Rache kühlen in der Verwegnen, n der Verwegnen Blut, lass meine Rache kühlen in der Verwegnen Blut, in der Verwegnen Blut. Jesus. Du sollst nicht Rache üben! du sollst nicht, du sollst nicht! Ich lehrt' euch blos allein, die Menschen alle lieben, dem Feinde gern verzeihn.</p> <p>Seraph., Jesus. und Petrus. O Menschenkinder fasset dies heilige Gebot: Liebt jenen, der euch hasset, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott, nur so gefallt ihr Gott.</p>	<p>(イエス)まことにつげん、なんぢらたがひに、あひあいすべし、あだをゆるせ、なんぢらたがひに、あひあいすべし、ゆるせ、あだをゆるせ。</p> <p>(セラフ)きけ、ひとびとよ、あいのおきてはかみよききたる、かみのみより、あいのおきては、げに、かみのみより。きけ、ひと、きけ、ひとびとよ。</p> <p>(セラフ、イエス)せいなるおきて、ともにまわれ、あだをあいせよ、ちちななるかみのこと。(ペテロ)わがころ、げに正義と真理のいかりに一、いかりに一、わがころ、いかりにともゆ。</p> <p>(ペテロ)なをしひたぐる、その一手に、あだをむくいん。よこしまの手に、あだをむくいん、よこしまの手に、あだをむくいん、あだをむくいん。(イエス)まことにつげん、あだを、ゆるせ、なんぢらたがひに、あひあいすべし、あだをゆるせ。</p> <p>(セラフ、イエス、ペテロ)せいなるおきて、ともにままれ、あだをあいせよ、あいせいよ、ちちななるかみのこと、いざ、あだをあいせよ、あいせよ。ななるかみのこと。</p>	<p>JESUS. Thou shouldst not ask for vengeance, For thou hast come to know That men should love each other, And pardon ev'ry foe, for thou hast come to know that men should love each other, and pardon, and pardon ev'ry foe.</p> <p>SERAPH. Give ear, O man, and hearken, By God alone is taught The holy lore of loving In deed, and word, and thought, The holy lore, the lore of loving in deed, and word, and thought, Give ear, O man, give ear, O man, and hearken.</p> <p>SERAPH. AND JESUS. O sons of men, with gladness This holy law fulfil, To love whoe'er may hate you, As God, as God Himself doth will. PETER. Mine inmost heart is burning, burning With righteous, with righteous wrath and zeal, my heart is burning, my heart is burning, burning with righteous, with righteous wrath and zeal.</p> <p>PETER. I would that all my vengeance, that all my vengeance, Thine impious foes might feel, Thine impious foes might feel, I would that all my vengeance thine impious foes might feel, thine impious foes might feel. JESUS. Thou shouldst not ask for vengeance, thou shouldst not, thou shouldst not, For thou hast come to know That men should love each other, And pardon ev'ry foe.</p> <p>SERAPH., JESUS. AND PETER. O sons of men, with gladness This holy law fulfil, To love whoe'er may hate you, As God Himself doth will as God Himself doth will, whoe'er may hate you, whoe'er may hate you, as God, as God Himself doth will.</p>
---	---	--

【譜例1a】

198
Fa - ther! with tear and bow'd
父 親 様 へ 涙 と 祈 願 書 を 下 げ ず
cres. p dolce
Legni p dolce
pizz.

205
his prayer to Thee. By Thy
祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
his prayer to Thee. By Thy
cres. p
arco

【譜例1b】

198
Va - ter! Tief ge - beugt und
父 親 様 へ 深 く 祈 願 書 を 下 げ ず
Fa - ther! Tief ge - beugt und
父 親 様 へ 深 く 祈 願 書 を 下 げ ず
p dolce
p Archi
pizz.

205
bi - nauf zu dir. Dei - ner
祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
his prayer to Thee. By Thy
cres. p
arco

【譜例2a】

(6) 4/2 RECI. — "MY FATHER, O MY FATHER."
RECIT. JESUS. (TOWARD)
父 親 様 へ 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
My Fa - ther, be Thou my strength, give me strength to
父 親 様 へ 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
Piano

hear! 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
Timp
pizz. Str. (senza sord.)

【譜例2b】

1b. Recitativo
55
Christus
Je - ho - va, du, mein Va - ter!
父 親 様 へ 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
My Fa - ther, be Thou my strength, give me strength to
父 親 様 へ 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
pizz.
2 Fl., 2 Ob.,
2 Clt., 2 Fg.
2 Cor., Timp
3 Trb., Archi

58
mir! 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
baur!
Timp
pizz. Archi (senza sord.)

Sie na - her nun die Stun - de
今 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
Now is the hour ap - proach - ing
今 祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
mei - ner Lei - den,
祈 願 書 を 祈 願 書 へ 祈 願 書 を 祈 願 書
when I suf - fer.

